



諸國里人談卷三







諸國里人談卷之三

五山野部

○富士	○阿蘇	○焼山	○雲仙	○白峯	○風穴	○土團子
駿河	肥後	陸奥	肥前	讃岐	和泉	甲斐

○浅間	○妙義	○立山	○彦山	○洞穴	○風穴	○土饅頭
信濃	上野	越中	豊前	若狭	甲斐	周防



○室八島

上野

○野守鏡

大和

○短尺塚

陸奥

六 光火部

○火辨

○橋立龍燈

丹後

○分部火

伊勢

○虎宮火

横津

○野上龍燈

周防

○外水

武藏

○阿漕塚

伊勢

○里塚

武藏

○不知火

豊後

○林火

隠岐

○二恨坊火

横津

○蹉跎龍燈

土佐

○光明寺龍燈

相模

○狸火

横津

○秋葉神火

遠江

○狐火

京

○入方火

越後

○姥火

河内

○千方火

伊勢

○油盜火

近江

○火浣布

美濃

諸國里人談卷之三

(五) 山野部

○富士

駿河富士山ハ相傳あいつと孝靈帝五年こうりやうていごねん十一月じゅういちがつ廿地折にじちさて
 大湖おほいけと云い是江列琵琶湖えいれつひやこ其土大山そのちおほやまと成な駿河乃
 富士ふじ是こゝ有り江列三上山えいれつさんじやまハあつ簣し有り溢あふる成な故ゆゑ其
 其形似そのかたちりと云い毎ま年ねん六月ろくがつ登山とんざん云いるふ百ひゃく日にちの潔けつ
 齊さい江列の人えいれつのひとハ七日しちにちの潔けつ齊さい之の云い山やまの荒あは時ときハ
 近江おんみの土つちをよ蔭かげハ則すなは濁にごると之の云い山やまの諸書しよしよハ云いる

此山ハ諸書ハ云いる

百葉
天地のつられし時よ神さひてまゝさき駿河なる神の
言根を天の系ありさけそれハるる此新をかくらひ
てる月乃光りて見えす白雲をけけははるる時
そ言を海より語りつすしひつすゆん婦の言根を
秀吉公朝鮮を征む時加茂清正元良哈おあて
一人を捕由名を世琉兜宇須と云元日奉松前の
人より信託し濟列少あるの二十年之清正悦
々尊と改て後及次郎と号次郎と云此地天
晴々時ハ富士山を見え不甚なり

又朝鮮人末胡乃時駿河ゆく富士城きては山
我よよ見ゆると云元日奉少富素比々山三あり
一ッ八奥列津恒弘前の南岩城山とつふ言山あり
形富士小違ハ此

西行法師

婦見えそ富素比々山乃の忌城の山の言此晴
又薩列類娃那ハ高山ありうらほ急と云是ま
富素比々

あまのつられし類娃の那のうら急と云やつらの婦と云ん
按ル母茲を以て見えハ朝鮮少見ゆらハさつら婦と云

色ふ紅

○浅間

信列浅間嶽ハ佐久郡之嶺常ニ燃ル性昔ナキ
小燒之時吹出シテ名ニシテ輕井沢出掛の間
乃曠原ニ燒石限リ多クありモ毎季四月四日
潔齋シテ登山古多ク人習作の筒水ヲ終
一草鞋ニ浸シテ大氣ニ防ク便トシ林業より
四里半當リトシテ佐久郡ハ多ク浅間山乃
内より上列より雄氷峠トシ自然ナリトシテ

凡四里不ト登リ峠より輕井沢ハ八里ニ至ルニ
是ニ依テ考モハ上列地よりハ嶺トシ凡八里の
高山有り富士ハ亦多ク九里之内のニカクシク

○阿蘇

肥後國阿蘇山ハ別阿蘇嶽ニ社ハ林業あり
神池 毎日猛煙起徒昇山谷鳴動す○大明一統志
云日本國阿蘇山名火起接天俗異而禱之有如意
宝珠大如鷄卵色青夜有光

○妙義

上野國妙義山ハ岩山ヲ峯ク眺み焚て品ニ
とて祥と云るるごとく 樹木亦く多く繪あり唐
の山多似て東乃方厩橋惣社の名より山を
見事ハ峯らる此亦真丸なる穴あり月輪と云
おとあれ乃雲行多く見ゆる人云百合
若大臣の射抜たる箭の跡有り此乃山の林葉安
中松井田よりそれハ穴なり是ハ巖とく之行合
まそ好りふどく山歌乃やうに足ゆる或云人の之
み自より子ハ木柄より子ありか時古娘山乃

滴ましく肩ツ人古極く剣有り又奈奈良なるの由
多やうなる山の水を昔に造りたる人の心ハ奈奈良江戶
大坂なるの曠野大河の流を飲人心ハ至く度
くともその理をたかしくあり

婦人老く病をたすやひ山 花雪

都の山の悠なるをいふとていふ深きなり

焼山

陸奥南部領八戸あり大畑よりありあり三
里半くは山時とて焼くありよりありあり

夏小意覺大師乃修石の一千体の石地蔵あり
 中宮の長五尺あり他は皆少佛ありふよりて
 人は此より去りて僅小狭しきより近き頃園空
 と云傍ありて修補し今千体満ちり嶺は
 地獄といふ所あり三塗川塞河原山を以塔を
 修り修羅道は地の面みれ石より長二十丈
 幅七丈其石は血色のどくろりの散り降り
 有り秋の山は秀く美りて刀鋒と連く比
 づるありて藍屋の地獄酒屋麴屋の地獄と

山とそましく乃色成ありと有り
茲に柏石と有るを
 詳に見

○立山

立山の越中國新川郡に祭神伊弉諾尊力尾
 社の牛力雄命は是禁の大官に此より絶頂より
 十三里余其間旧路あり此嶽は佛尊の貌不
 似り膝と一の越し腰と取と二の越しつひ
 肩と三の越頭と四の越頂上佛面と五の越と
 是市の谷より道は小連大連とてくよりふた
 ころくゆるるありは連三條小波谷にあり

地獄道又地藏堂あり毎年七月十五日の夜胡蝶
あまじけ所み出く霧抱ふこ身成精靈市と
いふこ一鐵より五ノ鐵まそ各堂あり一宇一石
ふ取る地ありあまじけ九品より一行人つえ
こちちをし措く奉社みあまじけ

地獄谷 地藏堂有 八大地獄 各十六の別名 一百三十六地獄
血の池ハ水色赤く血のおとくふく猛火燃
立く罵詈訛流の声聞く惡しきありは海
あり北み釵の山あり岩石持く鋒のこく煥

烟言み絶より

俗云此山みそ烈ハ思ふ人の亡靈身のこく
おんゆるこ元祿の頃江戸牛込池何某同行
三人禪定しるふ路み熱く時行りて道の
邊乃木陰み一夜をあり物を念佛し
居しる不誰人ともあはれまきく日若衣食事
まの毛んと腕みきく盛んも一巻を出れは老
こけ那と何心形くらけり三人是を分て
食し疲まきしやれひかると近くみ人家あふ

宿んぞふあしを是思ふをさしひく
明りあを枕をぬきんとあうり
うまそそ人家ありやうく
なうりて五七軒の里あり
後けぬ中此半も諸ふそ
里ありとそ件の枕乃出く
あましそまはるる家の息が
別一七日ありとの家も
をれハあ親大よ悲歎く
懸くけりし

○雲仙嶽

肥前國高木郡の高山五十町上小普賢嶽あり
山常々燃く蹠の考ハ行半あり
穴敷十ヶ所あり西あり
六尺馬煙の涌出り
地獄ハ白濁く米俣
白に青土涌麴の色のご
ハ青みどりしそ藍の如く
乃色

ひて其の名有りをり極火盛んし等活大焦熱
とそ去べし其流稍熱やそ湯のこもろふ
小魚多くあり是心奇なりとん林も温泉あり
入湯の人絶ん○當山の伽藍ハ文武帝宝元年中
行基草創の地日本山大乘院満明密寺亭
三千八百坊有塔十九基有りしとて正年中
耶蘇宗門盛み行し僧俗邪法も臨時多寺
の僧侶又然つる困り破却せしめて正法も由せ
ざるもの皆若山の地獄に墮入る今礎或石佛の

み僅も残りやそくふ一寺此伏有り

○立所山

豊前國田川郡あり豊前豊後筑前其
根もがろく大山の十の谷四十九乃窟有り衆
一の谷を玉谷とて子靈泉涌出ハ是を飲ハ諸
病減治とて又玉家夏ある所ハ若水温泉
と云り三の嵩ハ鼎乃如く三神跡を垂流ハ北
岳ハ天忍穂根尊中岳ハ伊弉册尊南岳ハ伊弉
諾尊之姓古より守護入此の山し金の名井

より上ル半六十二所之祭禮二月十五日

○白峯

讃岐國河野郡より人五十七代崇徳院を初
今以靈氣了く海くく程く此奇持多し
崇徳院考初山み左近孫ひく時松浦を具
を捨ハセ孫ひく

松山の松浦凡吹をえひらひく思ハ恋はれ具
と孫ひくより時浦の具は松の字山の字
を現をよそ是を恋をれ具と号以長寛二年

御宝算四十六歳ゆして此所を崩御し孫ひ
くして西行法師泰福く時時陵吟動は于時和奇
を孫して納めはれ孫ひりりるるなり

よもや買むく乃玉の系とそをからん孫ハ何よるせん

○洞穴

若狭國小濱の空印寺八百比丘尼の住し初まり
別所あり傍に洞穴あり其奥限りある
土人云まき寺五六世公前の住僧は穴ふ入て奥
をたつたふ三日成強く丹波の山中み出つたなり

相傳ふむく女傳ありくけふも伝ふらひ八百
尋もしてそ此容貌十五尋の壯歟ありて
八百比丘尼と稱し里語め云け女傳ハ人魚を食
くも故に長壽ありと云り○又氏藏國豆立穀
水波田村魚眼寺仁王門の傍に榎の伐株有
周り二丈あり莖を食て是若狭の八
百比丘尼の載る木と云傳へたり茲も又地中
の地蔵といふあり近年壬申より地中より
奉るくそ此石椁ハ八百比丘尼大化元年と

彫り大化ハ三十七代孝德帝の年号とて寛
保もそ凡一千百餘歳あり

○風穴

泉列和泉歌牛滝山ハ岩窟あり深き量あり
常々烈風ありと云風穴と号し常々山ハ後
引者の草創あり弘法大師惠亮和尚の經歷
多し大威徳寺といふ大滝三ツあり一の滝 二
一の滝 三の滝 四ハ 巖山の惠亮和尚此山を大
威徳の法を傳せし時大威徳寺三の滝より

出況あり〜とてそ北麓くる所の半石と成り伏
せりごと〜其長四尺八寸〜半庵と云又風穴ハ
諸玉も多し

風穴

甲斐國身延山昔ハ蓑父と書う日蓮上人同基
乃後身延と改む蓑父ハ新羅三郎四代の終南翁
之即実長の領地之板野寺牧波木井三郷の領
主也波木井夜と稱す上人妙法依り蓑父山を
靈場と名りしむ〜西行法師 愛ふ多し

雨志の〜蓑父の里北垣志を〜とて其を即ち蓑父と爲す
此谷を〜常谷と云ふは初音〜その法方の谷の
うみん〜とて題目堂のあり〜風穴あり〜とてよ
〜とて多し〜とて極熱とて愛ふ〜とて此山を
〜とて〜とて信列法師の通り〜とて
〜と云り〜とて故り法師の神休蓑父山の室物不
あり七面山ハ夫より上七半三里山頂大寺多し池
あり〜とて此形曲流のあり〜とてより涌清泉水
其水の流るる〜とて春氣滝と云百丈の白布と云

せりあまの天竺多熱池の水未なりと云り此池も
七好きき河りくさくまき半の身延温おつぐりて交
小省

○土團子

甲斐國巨摩郡團子新井と云山の堰に土團子
と云河り状の大小を河まきとて常此團子のまきし
丸まありみ少角と云りまありまきり色はうま黄
色あして大豆粉を衣まきとてまきとて割ハ中み
馬き土餛のごとくふあり替へ替なる半少の

おと

○土饅頭

周防國吉敷郡高原氷上山ハ敵山と稱しとて靈
地ありけ山み米石餅土饅頭と云ふあり土中より
堀出は是を以天行病を防き瘡乃おつと云
神妙なりむと云毎年二月十三日北辰尊星乃
祭あり日本第一靈験の有六祭之千種百味を倭
多々良家代々千余歳祭り来たり運の祭と云ハ
是なり多々良家千余歳の内ハ毎年お星と云り

臨みたり天文十六年より早きことあり臨み大
内義隆より祭新絶はそ北むりの祭借土石と
成り土中埋きこと云り○大内家八山陰山陽乃
大守當國山口の城に住り千歳相續する家と
國中の能ひ都は坊あり

○室八島

下野國惣社村室八島明神野中清水あり
其水氣立き煙のこもる火はむらのや
の煙とあり法性寺内大臣の歌合の時坊津が絶

だく〜室のや奴と〜けり〜判者後基ある
たくの五文字城能〜けり海に北煙あり

いそ〜思ひあり〜むらのや海の煙あり
ありけりむらの八島〜煙ありあり

○逝水

武蔵野ふけりむら〜野の画代〜木野
宇陀野よりふけり府中のまの曠野あり
逝あり〜水あり〜むら〜野の津置の草

そこくく^いき^あく^く番^るる^る春^北そ^ふ地^氣未^きく
あ^らふ^らり^見事^ハ草^の葉^未を^しち^ろく^と水^の流^る
く^くく^くみ^んゆ^くく^く北^西あ^まむ^りて^見事^ハ草^の
新^あく^てま^いむ^ふ又^流る^るの^新あり^ら
ま^まを^ま其^あと^いふ^は新^の先^へゆ^く途^の
や^うち^のゆ^みか^く各^のけ^り春^のり^夏け^て何^り
秋^のハ^如く

^夫木^はあ^らは^しり^とあ^らる^る途^のあ^のお^ける^れる^世を^なる^る
後^れ

○野守鏡

南都春日苑^の大野^の野守^乃池^{あり}雄略^帝御^狩
乃^時鷹^前く^形ふ^未く^一人^の形^を宿^のあ^らる^と
あり^てあ^まい^て奏^以池^水を^其の^うら^と見^く
居^る是^をと^りん^く野^守の^鏡と^云
筈^の形^をの^鏡は^く飛^びひ^るる^る

○阿漕塚

伊勢國安濃津^{阿漕}浦^乃野^中は^榎の^古木^を栽^す
く^塚あり^漁平^次く^塚し^{阿漕}の^のハ^世不^毎年^七月^{十六}
十六日^津の^岩田^橋め^て深^更み^きけ^ハ仲^小綱^引

乃教(なほ)らるるつひつてさうすい孟(まう)葉(えつ)盆(ぼん)の内(うち)近(まじ)在(あ)り
の子(こ)倍(ばい)童(どう)大(だい)勢(せい)つるなり 施(い)大(だい)打(うち)石(いし)を心(こころ)大(だい)師(し)と切(き)り
大(だい)師(し)半(はん)ありあのしホのいらんあふふあこ記(き)甚(しん)提(たい)ふ
んすすいしをやしてあうく半(はん)おびつてくすきを
割(わ)れれどもあへてきん隠(かく)事(じ)思(おも)ひ出(で)くは半(はん)を
るはえりの波(なみ)津(つ)人のまであうと子(こ)をさるは阿(あ)
こまうはぶいんと吊(た)謂(い)なり

○短冊塚

奥(おく)列(れつ)高(こう)館(かん)の城(しろ)跡(あと)ハ今(いま)色(いろ)半(はん)知(ち)なり 僅(わずか)少(すく)跡(あと)り

きり慢(まん)水(みづ)芝(しば)山(やま)なり 小(こ)草(くさ)茂(さ)合(あ)ふり 所(ところ)固(かた)猿(さる)尾(び)
亀(かめ)井(い)等(ら)の村(むら)死(し)乃(の)跡(あと)ハ朽(く)を裁(き)くむる城(しろ)跡(あと)なり
芭(ば)蕉(せう)行(ぎやう)御(ご)の時(とき)

夏(なつ)草(くさ)やつらあをさう夏(なつ)の跡(あと) 芭(ば)蕉(せう)

所(ところ)の川(かわ)人(ひと)けえんさくを茲(こゝ)也(や)埋(う)め 碑(い)と立(た)は祭(まつり)勺(すく)
と彫(う)り 短(た)冊(さふ)塚(づか)と号(な)し今(いま)も存(ぞん)在(あ)り

○黒塚

武(ぶ)藏(ざう)國(くに)号(な)立(た)影(かげ)大(だい)良(ら)乃(の)驛(えき)の表(うら)の中(なか)ありま
奥(おく)列(れつ)安(あん)達(たつ)郡(ぐん)ありまれども東(とう)光(こう)坊(ぼう)悪(あく)鬼(き)退(たい)

敬の地ハ武蔵の足立郡を奉而云り 則東光
坊開基の寺東光寺と云あり今ハ曹洞宗
紀列那智乃記録より武蔵國足立郡の悪
鬼退散とありく奥列の事ハ足立とあり

六 光火部

○火辨

陽火ハ金を爇の石を燧の火木を燭の火是地
乃陽火之大陽の心火星精飛火ハ天の陽火君
火ハ人の陽火く 水中火石油火ハ地の陰火龍火

雷火ハ天の陰火多れを物をやくは陰中の
陽火より淺河阿蘇蘇雲仙燒山の火ハ砂石を
燒是より陰中の陽火く ○本草綱目云田野燐火
等の火ハ火も似く火もあへん連体もそ似せり
火のいろ色青く熾る 寒火陽燄鬼燐金
浪の精氣の火ハ陰火を物を焚火又石灰桐油
麦糠馬糞鳥糞より出る火ハ陽火もそ物を燒く
雷火ハ天の陰火多れを物をやくは陰中の
陽火より淺河阿蘇蘇雲仙燒山の火ハ砂石を
燒是より陰中の陽火く ○本草綱目云田野燐火

人及牛馬兵死者血入土年久所化皆精靈之極也其色青狀如炬或聚或散來逼棄人精氣下略

不知火

豊後國安古郡甲浦の後の森林より挑灯の如き乃大初更の頃より出づ海は松山より比叺のそわく空中を行合戦おぼくもそ海中一羽と落る又海上をそ鷄の雛合ふひくそ其時捻あひく後出づ所の山林中今々四五月八九月おかるんありあまをばくし北よりぬ火とそえ

それみより有く来歴志述此日本才一の妙大有り今傳へ了乃ぞく言葉とある

橋立龍

丹後國興謝郡天橋立お毎月十一日取す頃五寅の沖より龍燈現し文殊堂乃方おろみより堂の前お一樹の松ありおれを龍灯の松といふまじ正五九月の十六日の夜お空より一燈くはる是誠天燈といふこす一火あり是を伊勢の海燈といふ切戸文珠ハ海中より出現圖浮檀金

の像あり拾芥抄ニ云智恩寺ハ丹後九世戸の文
殊天龍六斎供遊明とあり松並の林海中一
さしゆり東西二里南北二町あり北より南へ
て入海し船を渡り北間四町余ありを佳景
乃北日本三景の其一とす

夫木
よきの海内の廣ふううさひくませと後の天の栲立
○林大火

隠岐國の海中は夜大海より沈む是禁火権現
の神靈と此神を風波を澄みよこしる事の國

あそと強風ふあひく多船夜中方角をさすは
に此神ふ立系し神号を唱ふ事ハ海と神火
沈むと難し道き多りさしゆり後鳥羽院
時始く古道始つ時風より浪あしく御船
危しよりきれハ

我しをる影急やう相手の海乃あき浪風ハ吹
若御製衣綱受すしりく多や浪波静く取入て
神火出況凡

海よりなるやとさしゆり何きたく火の煙るらん

伊弉波三保の浦よりすねそのち大山権現と稱す
所多給ひ焼大山を改く雲上寺と号せ給ふ
○海部郡島前美田庄あり一條院の所中に海
中より出現し給ふ大山権現離火権現とて祭神
大日要貴

○一曰此乃天照皇太神之垂跡同一而於今海船多
免漂災者因神火光最不疑

○分部火

伊勢國安濃津塔世の川上分部山より小寺地灯石

とちの火五寸を百も一面ぬ出く從横も飛ぶ
て後五六十程一と海より塔世川をさる
半水よりたや一又塔世浦小鬼の地屋乃火と
ふ阿りけ大申も冬老るる姫乃敷のさちあり
きりかの川上の火と竹合入り給ひ飛よりなりと
しく机厨もは情あり少時して又とるる海
里そ北後わくれとひとるハ仲のさく飛可川上
一とちちあり

○二恨坊火

横津國高槻庄二階堂村に火あり三月の頃より
六七月乃次出る大さ一尺をり家の棟或ハ諸木の
枝梢ゆきあり近く見まハ眼耳鼻口のなか
りありきゆき人の面のごとく雙言をいふ事か
それハ人民ゆきおそれた昔はあま日光坊と云
山仗阿り修法地よまより村長が妻病ゆけ
日光坊ゆ加持をいさめりゆき圍かへり一七日祈ふす
あまち病愈より後ハ山仗と女密通よりと云ふ
よろく山仗を教へてより病平愈の恩も謝せん

○虎宮火

其上教害ハ二恨妄火と成りて彼家の棟を毎夜
飛来して長とより教へくるなり日光坊の火と云
ふ事をして二恨坊の火と云ふなり

横津國急下郡別府村の虎の宮の跡と云ふより
出く斤山村の樹の上ゆき海火の玉なり雨夜か
あまゆきあまふ多ゆき人おゆきの火を火繩か
とゆつけむくむそれまはゆき虎の宮又奈
豆岐又も子是別前ゆきあまの日光坊一と云

そ北みぎ照あきをし祭まつり神かみといつつるる俗よこ説とあり又云延喜
元本書名三換ス
抄列武庫郡各次神と祭ル歟

○蹠す陀だ龍りゅう燈とう

土佐國幡多郡蹠陀岬高知府西三千里蹠陀明神小天燈龍
燈あり天あまといつつの火をゆきは日ひ時とき小海うみ中なかより龍燈
既けん多たくく少す多たふふ七しち石いし思おも儀ぎあり○一天いち燈とう龍りゅう燈とう○潮石
凹くぼの石いしあり満みち夕ゆふの時ときハ水みづ湛たん于お浮うの節ハ水みづなり○龍馬
虫むしの時とき小龍馬りゅうま来き々々小笹こささをし々々ふけたたの笹はさ々々
之このの名々々々々○震石ゆづりいし方かた六尺高むくぢ四尺よぢの石いしあり

其上その上うへ一尺いちぢよりの石いし有あり六尺むくぢの石いしといつつるる上うへの小石
動うご出でる○金石きんせき扣くわきく々々留とど音ね金かねのこ々々○日ひ毎ごと雨あめ
毎日まいにち午うまの時とき小雨こあめ降ふるる今いま以も遠とほくく○不ふ増ぞう不ふ減げん水みづ
霖あめ雨あめ増まるる早はや天あめ小減こげんる
昔むかし忠ちゆう儀ぎ上うへ人ひとは所ところに住すむ後のち小普こふ陀だ洛山らくざんにある
時ときの人名な残のこりて相あいあひあひあて蹠陀すだをして帝てい也やといむ
その外ほかより蹠陀すだ寺てらといふまじま調てうたた々々大おほかかりく々々死して
石いしとるるる大おほ石いしといふまじま河かりく土佐守忠義とさもりちうぎハ忠義ちゆうぎ我われ上うへ
人ひと乃すなはち再また誕たんとといふまじま諱なづかをし判はんも相あいあひあひあといふまじま普ふ陀だ洛らく

山ハ中柔浙江省の嶋あり寧波府の回なり
梅岑山とて云觀音の淨土と曰奉此僧慧華と云
人此所を同基以此島今以出家の任九列あり
二百五十里あり

野上龍燈

周防國野上庄熊野權現也毎年十二月晦日丑
乃刻み龍燈既也又西の方五里程龍が口より
山より矢を射が如く飛來々神火あり里人是を
除して越年也

光明寺龍燈

相模國強倉光明寺乃仲也毎年十夜の内一五夜
龍燈既也を多り此海上をまうりて見ゆあり

狸火

標津國川邊郡東多田村の鯉鰯也燐あり火人の
の容とある一ある時ハ牛を牽て火を推乃一之
是を名ぬ人そ火を乞へて御草をのきてお務り
ふるたのふりるる害をあらたすハ雨夜ハ
出るるり所の人ハ狸とて云

○焼火

河内國平岡^{ひらたか}の雨夜^{あめよ}一尺^{ひとしち}をり^{をり}の火^ひ乃^{すなは}玉^{たま}近^{ちか}郷^{きょう}母^{はは}龍^{りゆう}
作^{つく}此^{こゝ}初^{はつ}傳^{でん}ふ昔^{むかし}入^いの焼^や者^{もの}平^{ひら}岡^{たか}社^{やしろ}乃^{すなは}神^{かみ}焼^やの油^{あぶら}
を夜^よ毎^{まい}母^{はは}盜^{ぬす}死^して後^{のち}燐^{りん}とありと云^いこ^この^のこ^こ
焼^や大^{おほ}母^{はは}逆^{さか}者^{もの}河^かり^りか^かの^のて^て飛^と来^きて^て西^{にし}前^{まへ}に^に落^おち^ちて^て俯^{うつ}
て倒^{たふ}る^る溜^{たまり}ま^まえ^えき^きハ^ハ竈^{かまど}の^のや^やの^のき^きこ^こ此^{こゝ}竈^{かまど}を^を叩^{たた}く^く音^ね
あり^{あり}忽^{たち}ち^ち去^され^れ遠^{とほ}く^く見^みま^まハ^ハ園^{のぞ}を^を火^かき^きり^り是^{こゝ}あり^{あり}と云^い
竈^{かまど}静^{しず}まり^りと云^い

○秋葉神火

遠^{とほ}江^え國^{くに}秋^{あき}葉^は山^{さん}より夜^よ玉^{たま}の^の如^{ごと}く乃^{すなは}大^{おほ}哉^げ許^かし^し如^{ごと}く
空^{そら}中^{なか}を^を飛^とぶ^ぶ仲^{なかつ}の^の方^{かた}乃^{すなは}幸^{さい}折^せと^とあり^{あり}土^{つち}人^{ひと}是^{こゝ}城^{しろ}
狗^{いぬ}窟^{くつ}の^の漁^りあり^{あり}と云^いり將^{まさ}して其^{その}二^{ふた}三^{さん}ハ^ハ浦^{うら}と^と乃^{すなは}漁^り者^{もの}
と云^いり

○千方火

勢^{せい}列^{りつ}を^を志^し郡^{ぐん}家^け城^{じやう}の^の里^{さと}川^{がは}俣^ま川^{がは}の^の水^{みづ}上^{うへ}より挑^{たけ}打^{うち}石^{いし}
とあり^{あり}大^{おほ}川^{がは}の^の流^{なが}れ^れを^をひ^ひて^てと^とる^る幸^{さい}あり^{あり}と云^いり^り大^{おほ}
き^き城^{しろ}千^ち方^{ほう}の^の大^{おほ}き^き子^こむ^むむ^むと^と後^{のち}系^{けい}の^の千^ち方^{ほう}ハ^ハけ^け不^ふ仕^じ
し^しり^りと云^いり^り大^{おほ}手^ての^の門^{かど}の^の礎^{いし}の^の秘^ひ今^{いま}も^も存^{ぞん}せ^せり^りと云^いり

旗屋村的場村丸の内村三之丸二の丸本丸とつふ村
あり今凡七千石程乃而千方ハ今見大明神と云
別は所のうぬを懸く

○狐火玉

元禄のちあ乃頃上京の人東川一夜川出く綱を打
きらか茂の意をそ狐火玉のとありくふそりあ
綱を打くをこれハ一筋の響くきりぬ綱の中ふ光る
ものさすら玉のおどく母を此光り赫くそりあ
持取り翌日はを足さハこれ色う花白く鈴の

卵のおどく一盞ハ光り一敷か入まハ輝り夜川の
折く挑灯女あまをさうそ共輝獨よりも鳴くそ
我を宝ありと悦ひ秘蔵せうあ時又夜川
よ出りうかの玉を紗の袋か入る時かかけて綱を
打く大さ一箇をりの大石と相れどきあ川の
らんぬと居る川あり十方ハを祿よりあまハい
と響くあま玉の光清くう備をさるはあ
破ましく玉如く二三間むあま光りありあハ
とりえされうと口相く綱をさる造り

しう強ふりし時だしくむすく時り也

○油盗火

近江國大津の八町お玉乃ぢく此火豎横よ飛行
在兩中おまかきくば有土人の云むり志賀の里
に油を賣者あり取毎お大津辻の地蔵の油
を盗りりかそ此者死して屍頭をとりてやまひ
の火を不潔此として

○又叡山の西乃林に夏の夜燐火起是を油
坊と云同塚おまはし七條朱雀の道元が火み肌
は類ひあり是諸國も多く有

○入方火

越後國蒲原郡入方村庄右衛門と云村長の居宅の庭
お火の無出る穴あり常は白を以蓋とん其白の穴よ
し炬松のおとく赫くして家内を光し燧火千倍
此夜は近隣のあま火竹を以火見とあはし
お好しとくしは火をとり取の管の何とと
おし強火なる事おまきかおあお物を焼ば希代の
重宝あり寒火と云おを是なり

○大流布

元祿の末、長崎の住花明と云ふ人、布を
不特く白キ茶字の地組るもの、是を大流布と
云ふ。中、雲南省の南海に火山と云ふあり
其山の洞に常火燐あり、此中、炭あり、火を
筒子毛長く細く糸乃こき、捉て水中に入し
ハ別死、此を此毛を紡績し、布織り、此
づき、時ハ大中に入し、此、燒小清、此、本
こき、と云、唐より、此布を、本、奔、けり、や

清明戦ひの時、朔より、因性那を、味方、此、小
教の空を、流り、此、中、是、水、一、なり

○寒火

本草綱目云、南海の中、小蕭丘山あり、上、小自然の火
有、春生、夏滅、此、一種の木を、生、以、但、小、焦、黒色あり
又云、火山軍、其地、鋤、耘、を、辛、深く、入、時、則、烈、焰、あ
り、種、植、は、坊、在、亦、寒、火、之、矣、是、城、後、入、方、の、火、の、類
ひ、

里人終三終

水田氏所藏

